
森の中であなたを待ってる

モギイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の中であなたを待ってる

【Nコード】

N4584Z

【作者名】

モギイ

【あらすじ】

おばあちゃんの家に行く途中、うっかり寄り道をした赤頭巾はとても綺麗な男の人に出会いました。 自サイトに掲載した作品を転載しています。 異種間恋愛の苦手な方はご遠慮ください。

その1

幼い頃、みんなは私のことをリーザって呼んでいた。でも六歳の誕生日、おばあちゃんが私の頭に真つ赤な手縫いの頭巾をかぶせて言ったんだ。お前は赤頭巾。私のかわいい赤頭巾って。

大きな大きな森のはずれ、村から森へと続く細い一本道のほとりに、私の家は建っていた。道は細いながらも、小さな石板で隙間なく舗装されている。誰がこの道を作ったのか、誰も知らない。遠い昔、最初の王様がこの土地にやって来る前から、この道はここにあった。

小さな私は、家から森までの短い距離を行ったり来たりした。不ぞろいな石板は不思議な模様を描き、甲高い声で私に歌いかけてくるのだった。

ついておいで、赤頭巾。決して私から離れてはいけないよ。

お母さんもおばあちゃんも、口をすっぱくして同じ事を言う。森に入ったらこの道から離れてはいけないよ。森の中には危険がいっぱいなのだから。

一人でいる時には、森の入り口まで来るとすぐに引き返した。森の中へ入るのが許されるのは週に一度、お母さんに連れられておばあちゃんの家に遊びに行く時だけだ。おばあちゃんの小屋は森の奥深くにある。そして、その道は小屋の前庭まで続いていたのだ。

森には昔から、人に悪さをする魔物が住むと言われていた。途方もない大きさの狼を見た、という村人もいる。それでも幼い私にとって、森は心躍る場所だった。繰り返して通っている道なのに、毎回、見覚えのない場所を歩いている感覚に襲われる。この石畳の小道が案内してくれなければ、きっとすぐに迷ってしまったことだろう。

道は頻繁にその向きを変え、角を曲がるたびにいつも新しい景色が現れた。透き通ったせせらぎ、鮮やかな石に彩られた洞窟の入り口。思わず足を止めるたびに、母は私に声をかけた。「どんなに綺麗な物を見ても、道を離れては駄目よ。この道はあなたを守っているの。道はずれたら、二度とうちには戻って来られなくなるわ」

お母さんはお使いに行くたびにとっても疲れるようだった。私が八歳になった頃には、お母さんはすっかり老け込み、森に入った翌日は寢床から起き上がれなくなっていた。見かねたおばあちゃんは、ついにお母さんに言った。「メイや。お前にはもう無理だ。これからは赤頭巾一人に來させなさい」

お母さんは反対したけれど、おばあちゃんの言いつけは絶対だ。次の週からは私が一人でおばあちゃんの小屋まで通うことになった。

その日も赤い頭巾をすっぽりとかぶり、大きな籠を抱えると、私は外に出た。私一人では大きな荷物は運べなかったので、お使いは週に二回だ。

私たち以外には、おばあちゃんに会いに行く人はいなかった。村の人たちがおばあちゃんの話をするのを聞いたこともない。森から出て来ないから忘れられてるのかな？ それとも偏屈だから嫌われてるのかもしれない。子供の目から見ても変わり者だったけど、私はおばあちゃんが大好きだった。

ひとつだけ気に入らないのがこの赤い頭巾。おばあちゃんの言い付けで、出かけるときには必ずかぶらなくてはならない。そのお陰で、村中の人が私のことを赤頭巾と呼ぶ。私にはちゃんと名前があるのに。

石畳を歩きながら、私は何度も籠を持つ手を変えた。ぶどう酒の瓶がずしりと重い。初夏だと言うのに森の天蓋の下はひんやりしていたが、それでも額に汗が滲んでくる。私は道の真ん中に腰をおろし、水筒の水を飲んだ。後どのぐらいかかるんだろう。朝ごはんを食べてから家を出て、いつも小屋に着くのはお昼前だ。私は上を見上げ、木々の隙間から太陽を探した。その日はなんとなく、いつもよりも早く歩けた気がしていたのだ。

水筒を籠に戻し、立ち上がろうとしたその時、どこから甘い匂いがふんわりと漂って来た。木々の間に目を凝らすと、小さな空き地に真つ白い花がびしりと咲き乱れている。見覚えのない花だ。暗い森の中、そのあたりだけがぼんやりと白く浮かびあがって見える。

私は何も考えずに道から足を踏み出し、花畑に向かって歩き出した。おばあちゃんにお花を摘んでいつてあげようと思ったのだ。あれだけ繰り返し注意されてきたというのに、お母さんの言葉なんてすっかり頭から抜け落ちていた。

花畑の真ん中に座り込み、私は夢中で花を摘んだ。白くて柔かい五枚の花びらの中心からは長い金色のしべが突き出している。大輪の花には不釣り合いな細い茎は、私の小さな手でも簡単に折ることができた。立ち上る強い香りに頭がくらくらする。摘み取った花を籠にいれようと振り返ったとき、誰かが後ろに立って、肩越しに覗き込んでいたのに気付いた。

それはとても背の高い男の人だった。

驚いた私は手に持っていた花を全部落としてしまった。森でよその人に出会った事なんて一度もない。おかあさんは『ごろつき』には気をつけるようにと言ってたけど、この人がその『ごろつき』なんだろうか。

「こんにちは。驚かせてしまいましたか？」

明るい笑顔で男が尋ねた。豊かな金色の髪が、木漏れ日を受けて柔らかな光を放っている。彼の服は、周りに咲いてる花みたいに上から下まで真っ白だ。裾と襟には金の糸で細かな刺繍が施されている。まるで王様のお城の人みたい。『ごろつき』というのはもっと汚い人のことだと思っていたので、私は思わず尋ね返した。

「あなたは『ごろつき』？」

「いいえ、『ごろつき』ではありません。私の名はシグといいます。あなたは赤頭巾ですね」

「みんなそう呼ぶけど、本当はリーザっていうの」

「かわいいお名前ですね」

シグは微笑んだ。

「いつもこの道を通って、おばあ様の小屋を訪ねているでしょう？」

「知ってるの？」

「ええ。でも森の中で女の子に近づくと、怪しまれてしまいそうですからね。今までは話しかけずにいたんです」

「そんなことないわ」

「さっきは『ごろつき』だって言われましたよ」

愉快そうにシグが笑う。

「ごめんなさい」

私は慌てて謝った。この人は悪い人間には見えない。

「おばあ様のところへ行くのでしょうか？ 遅くなるといけません。歩きながら話しましょう」

そうだ、時間のことをすっかり忘れていた。おばあちゃんが怒るととても怖いんだ。私は慌てて立ち上がった。

「あれ、道がない」

道があつたはずの場所を振り返って、私は叫んだ。いくら細い道だからって、あんな近くにあつたんだ。見失うはずなんてないのに。

シグが蔑むように鼻を鳴らした。

「あの道は信用なりませんからね。あなたが見ていない隙に、さつさと隠れてしまったんでしょう。心配いりません。私が案内しますよ」

そう言うとは彼は私の落とした花を籠に納め、先に立って歩き始めた。私も後について歩き出す。足を踏み出すたび、黄緑色の絨毯みたいな下生えに靴が沈み込んだ。石板の上よりもずっと歩きやすい。

「道から離れてもいいの？ おばあちゃんはその道が私を守ってくれると言ってたわ」

「この森には昔から様々な生き物が住んでいます。中には人間を憎む者もいるんです。そんな者たちから身を守るために、古の人はあの道をつくったのでしょ」

人間を憎む者たち。ふと、村の人たちが狼の話をしていたのを思い出した。

「怖いわ」

「私がいれば大丈夫ですよ。あなたを守って差し上げます」

「あなたは強いのね」

「ええ、とても強いですよ」

「狼よりも？」

「ええ、狼よりも強いです」

シグは私の不安そうな顔を見て、力づけるように微笑んだ。

「そんな危ないところに一人で住んで、おばあちゃんは大丈夫なのかしら」

「おばあ様は別ですよ。あの方がこの森も村も、王様の住む都でさえ守っているんですから」

「おばあちゃんが？」

「あの方は大いなる力を持った魔女なのです。彼女が巡らせたまじないのお陰で、邪悪な者たちはこの国に足を踏み入れることすらできません」

「でも村の人達はおばあちゃんが嫌いだわ。誰も訪ねてはいかないもの」

「そんなことはありませんよ。誰もがおばあ様に感謝しています。王様ですら彼女には敬意を払っているのですよ。あの方の魔法が強すぎて、誰にも近寄れないだけなのです。血の繋がりの強い、孫のあなた以外はね」

私を見つめるシグの目が、きらりと光った気がした。彼は私の知らないことをたくさん知っているようだ。どうしてこんな立派な身なりをした大人が、私みたいな小さな子供に話しかけてきたのだろう。気にはなったが、彼の話に聞き入っているうちに、そんな疑問はどこかへ消えてしまっていた。

お日様が頭上に差し掛かる頃、おばあちゃんの小屋が見えてきた。ひととき大きなブナの木々にぐりりと周りを囲まれた小さな丸太小屋だ。苔むした屋根に乗った小さな煙突からは、料理の煙が細々と立ち上っている。手前にはさつき見失った小道が見えた。

「さすがにここまで来ると、いたずら者の道も隠れてはいられないようですね。さあ、道に戻ってください。あの道の上を歩かなければ、何者も小屋には近づくことができないんです」

私が小道の上に立つと、シグは私に微笑みかけた。

「私はここから先へは行けません。三日後に今日と同じ場所でまた会いましょう」

シグは私のお使いの日も知っているようだ。私には、あの花畑をもう一度見つける自信がなかった。何年も通っていて、今日まで気づかなかつたぐらいなのに。

「お花畑、見つかるかしら」

「ひねくれた道も、必ずあの辺りを通らなければならぬのですよ。花の香りを目印にすれば必ず見つかります。さあ、おばあ様が心配しないうちに早く行って下さい」

私はシグに別れを告げると、おばあちゃんの小屋に向かって歩きだした。ブナの木を通り過ぎて後ろを振り返ったけれど、彼の姿はもうどこにも見えなかった。

その2

それからというもの、私が森に入るたびにシグは花畑で待っていてくれた。すっかり彼が気に入った私は、おばあちゃんの言いつけを破り小道を使うのをやめてしまった。彼と歩けば、森はもう危険で見知らぬ場所だとは思えなかったのだ。

おばあちゃんの小屋へ向かう途中、シグは私をいろいろな場所へと案内してくれた。どこまでも透き通った深い泉や、リス達の住む古木、奇妙な形をした岩が並んでいる空き地、森の木々の間にはほかにもたくさんの花畑が隠されていた。以前小道から見た光景を話せば、シグは迷わずそこへと私を導いてくれた。

私たちはいつも木々の下を並んで歩き、シグは礼儀正しく私の話に耳を傾けた。彼が語ってくれるのは遠い昔に起こった出来事や、この森の話ばかり。彼自身の事は一切話さない。だからと言って話が尽きる事はなかった。自分の目で見てきたたかのように話す様子に、彼はとんでもない嘘つきか、とんでもない年寄りのどちらかに違いない、と私は思った。

村での暮らしは退屈だ。村の人達は私に優しくかったけれど自分の子供とつき合わせようとはしなかったので、私はいつも一人だった。この赤い頭巾をかぶるようになってからはなおさらだ。

シグとの森の散歩は私にとっての唯一の楽しみだった。そしてそれは十年後のある春の日まで続いた。

その日はいつもよりも森に入るのが遅くなった。一旦、村まで出ておばあちゃんの薬を貰ってこなければならなかったのだ。近頃おばあちゃんは胸が苦しいと言ってよく横になっていた。本人は大した事はないと言い張るのだが、週に二回では心配なので、私はほぼ二日置きに様子を見に通っていた。

薬屋の主人はおばあちゃんの様子を詳しく聞きたがった。どれが一番効くかわからないからと薬を三種類も出してくれたのに、お金は請求しない。村人は魔女に感謝しているのだとシグは言っていたけれど、どうやらそれは本当らしい。

薬を受け取ると私は早足で引き返し、一度家に戻って髪を整えた。私のくすんだ茶色の髪は、シグの見事な金髪に比べると全く見栄えがしない。それでも私は丁寧に櫛を通した。どうせ馬鹿げた頭巾の下に隠れてしまうのだけど、彼に会うときはきちんとしていたかったのだ。

シグほど美しい人を私は見たことがなかった。彼の瞳は森の木々を映したかのような緑色、金細工みたいなまつげで縁取られている。肌は白くなめらかで、街で見た磁器の人形みたいだ。こんなに綺麗な人だったなんて、小さい頃にはちっとも気づかなかったのに。おばあちゃんには申し訳ないけれど、シグと会う機会が増えて私は内心うきうきしていた。

出会いから十年も経つのに、彼はまったく変わっていない。服装もあの時のまま、雨の森を歩いても濡れもしなかった。さすがに今では彼が人間ではないのに気付いていた。森の奥に住むという妖精の類なのだろう。もしかしたら、あの花畑に宿る精なのかもしれない。私は彼に尋ねようとはしなかった。そんなことをしたら今の

彼との関係が壊れてしまいかもしれない。そう思うと怖かったのだ。

その日もシグは花畑で待っていた。初めて出会った日のように空は晴れ渡り、空気はほんのりと暖かい。今が盛りの純白の花々は、金の花粉をそよ風に散らしている。いつものように満面の笑みを浮かべて彼は私を迎えた。

「遅かったですね。赤頭巾」

責めるでもなく彼が言った。彼はいつも私を赤頭巾と呼ぶ。何度私が頼んでも、名前で呼んでくれようとはしない。

「ごめんなさい。薬屋に寄ってきたの」

彼は手を伸ばすと私の手から籠を受け取った。いつも荷物を運んでくれるのに、決して私に触れることはない。木漏れ日の中を通り抜けるたびに彼の姿は揺らいで見えた。触れても実体などないのかもしれない。

その日のシグはずいぶんと無口だった。時々黙ったまま私の顔に目をやる。訳を聞いてはいけないような気がして何も話さず歩いているうちに、おばあちゃんの小屋が見えるところまで来てしまった。普段ならシグはここで引き返すのだが、その日はなかなか立ち去ろうとしない。

「どうかしたの？」

とうとう我慢ができなくなつて私は彼に尋ねた。見上げた彼の体の向こうに、一瞬背後の木々が透けて見えた気がして私は目を凝らした。何かがひどく間違っているのにそれが何なのかわからない。

突然込み上げてきた得体の知れない不安に私は身震いした。

「赤頭巾、お願いがあります。もう時間がないのです」

今までにない真剣な面持ちでシグが私に向き直った。

「その頭巾をはずしてはもらえませんか」

「だめよ。おばあちゃんに叱られるわ」

「あの方は気付きはしません。お願いです」

「でも……どうしてなの？」

「それが邪魔をして、私はあなたに触れる事ができません」

「シグは私に触れたいの？」

心臓がドクンと鳴った。

「ええ、あなたは美しい。一度でいいからあなたに触れてみたいです。いけませんか？」

美しい？ 私が？ シグの口からそんな言葉を聞くとは思ってもしなかった私には、ぽかんと彼の顔を見つめ返すことしかできなかった。拒絶されたと思ったのだろう。彼の目に浮かんだ落胆の色に、私は慌てて頭巾を脱ぎ捨てた。

「ありがとうございます」

瞳を輝かせ、シグはまず礼を言った。どんな時でも彼はおかしなぐらい礼儀正しいのだ。彼は落ちている頭巾に触れないよう私に近づくと、私の頬にそっと右手を押し当てた。初めて触れる彼の手のひらは暖かく、わずかに震えている。ふふ、と声を立てて彼が笑った。

「どうしたの？」

「柔らかいんですね」

彼の手が熱い。いや、熱を持っているのは私の顔の方だ。恥ずかしくなって身を引こうとした私の肩を彼の腕が捕らえ、そのまま自分の胸へと抱き寄せた。

彼の大きな身体に包まれて、私の心臓は爆発しそうだった。背の低い私の頭はシグの胸の辺りまでしか届かない。見た目よりも厚い胸板を通して彼の速い鼓動が響いてくる。震える声で私は尋ねた。

「時間がないってどういうことなの？」

私を抱くシグの腕に力がこもった。

「魔法が弱くなっているのです。このままではもうこの姿を保つことができなくなってしまいます」

「シグは消えてしまうの？」

「いいえ、でもあなたはもう私に会いたくないかもしれませんが」

「どうして？」

彼はその質問には答えず、いきなり私に口付けた。間近に迫る彼の瞳の奥に吸い込まれそうな気がして、私はぎゅっと目を閉じた。ただ唇を押し付けられているだけだというのに、全身の力が抜け膝ががくがくと震える。くずおれかけた私の体をシグの力強い腕が支えてくれた。

ようやく彼の唇が離れ、私は目を開いた。シグは少し照れたように、それでも目をそらさずに私を見つめている。ぼんやりと霞のかかった頭で、私は一度も尋ねなかった質問をした。

「あなたはなんなの？」

シグはそれにも答えず、悲しげな口調でこう言っただけだった。

「これだけは覚えていてください。赤頭巾、私はあなたを愛しています」

そのとき後ろから大きな怒鳴り声がした。

「お前、何をしてるんだい！」

小屋の前におばあちゃんが立っていた。ブナの木の間を抜けて、ずんずんこちらに向かってくる。お日様はとくに頭上を通り過ぎていた。いつもより遅い私を心配して様子を見に出てきたのだろう。

シグは雷にでも打たれたかのように飛び上がり、くると向きを変えると一目散に走り出した。まるで肉屋の主人に見つかった泥棒猫のようだ。

おばあちゃんは彼の背中に向かって容赦なく怒鳴りつけた。

「あたしの孫に近づくんじゃないよ。どうせろくなこと、考えてやしないんだろう」

私は驚いておばあちゃんに駆け寄った。

「おばあちゃん、やめて。シグは何も悪い事してないよ」

「いつからあいつに付き纏われてるんだい？」

「最初に森に来るようになってすぐ……」

「なんだって？ どうして黙ってた」

どうしてだろう？ きつと私は知ってたんだ。もし話せば、おばあちゃんはいい顔をしないって。

「あいつに触られたのかい」

「少しだけよ。さっきが初めて」

おばあちゃんは厳しい顔で私の目を覗き込んだが、私が嘘をついていないのがわかったのかすぐに表情を和らげた。

「いいかい、あいつの言うことを信じるんじゃないよ」

私にそう告げると、おばあちゃんはその話題はもう忘れたかのよう
に別の話をはじめた。そして悲しいことに、その日からシグはば

ったりと姿を現さなくなったのだ。

それからしばらく経ったある日、おばあちゃんが言った。

「お前、あたしに腹を立ててるんだろう」

「どうしてそう思うの？」

「シグのことさ。お前に会いに来なくなったからね」

「腹なんて立ててないわ」

腹を立ててはいなかった。それは本当だ。おばあちゃんの事にはみんな理由がある。ただ……ひどくがっかりしていただけだ。

「あいつが気になるのかい」

「少しね」

「ふうん。お前も年頃だからね。あんな綺麗な男は街まで行っただていやしないんだろう？」

図星を指され赤くなった私を見ておばあちゃんは笑った。

「あいつは駄目だよ。男はね、見かけじゃないんだよ。このあたしは騙されやしないさ」

シグが現れなくなっても、私は小道を使わずにおばあちゃんの小屋まで通った。森のこちら側は、今では私の庭みたいなものだ。『人間を憎む者たち』は赤い頭巾をかぶった私に危害を加えることはできない。狼より強いシグでさえ私に触れられなかったぐらいなのだから。

それに、どこかでまたシグに出会えるんじゃないかって期待していたのもある。あの道を歩けば彼は私に近づけない。今の私にはそれがよく分かっていた。

その3

あの事件から半年が過ぎた。森の中はすっかり秋めいて、分厚く積もった落ち葉の上をリスや鳥達が忙しく飛び回っている。シグは相変わらず姿を見せようしない。私は彼に会うのを半ば諦めかけていた。

その日も私は大きな籠を抱え、おばあちゃんの小屋の扉を開けた。最近はおばあちゃんは昼間も眠っている事が多い。起こさぬように忍び足で中に入り、そっと棚に籠を載せる。頭巾を脱いで薬のびんを取り出すと、まっすぐにおばあちゃんの寝ている寝台に向かった。

「おばあちゃん」

寝台の上の毛布のふくらみに向かって私は声をかけた。

枕の上に見えるおばあちゃんの頭が黒っぽく見えて、おや、と首を傾げる。おばあちゃんは白髪だったはずなのに。覗き込もうとした瞬間、毛布が勢いよく跳ね上がり、巨大な獣が姿を現した。

狼だ！

私は叫び声をあげ、扉へ駆け寄ったが、狼は私の頭上を軽々と飛び越え、扉の前に着地した。くるりと向きを変えると、私に向かって獐猛なうなり声を上げる。

退路を絶たれた私は、慌てて駆け戻ると、寝台によじ登った。子牛ほどの大きさがある真っ黒い狼。村人達の話に出てきたのはこの

狼にちがいない。漆黒の毛を逆立て、歯茎を剥き出しにしてうなりながら、狼は寝台の前を行ったり来たりしている。噛み殺そうと思えば簡単はずなのに、猫がネズミをもてあそぶように、私をなぶって楽しんでるんだ。

おばあちゃんはどうしたんだろう？ 食べられちゃったの？

その時、足元から押し殺されたような声が聞こえてきた。おばあちゃんだ、おばあちゃんが私を呼んでいる。

「どこにいるの？」

「寝台の下さ。こいつが突然飛び込んできてね、危うく食われちゃうところだったよ」

苦しそうにおばあちゃんが答えた。

「そこなら狼も入れないのね。私もそこに隠れるわ」

「駄目だよ。そいつから目をそらしちゃまずい。背中を向けたらやられちゃうよ」

「だって、ここにいたら食べられちゃうわよ」

私は狼の剥き出しになった白い牙を見つめて身震いした。

「いいかい、お前は私の孫だ。強い魔法の持ち主なんだよ。そんな狼を追い払うぐらい朝飯前さ」

「じゃあ、どうしておばあちゃんが魔法を使わないの？」

「病のせいであたしの力はもう使い物にならないんだ。こうして息をしてるのが精一杯だよ」

狼は相変わらずうなり声を上げながら、部屋の中をぐるぐる歩き回っている。

「でもどうやるの？ 私、魔法なんて使えない」

「息を深く吸ってごらん。身体を中心に力を集めるんだよ」

「力って何？」

「いいからやってごらん」

私は狼から目を離さないようにしながら、おばあちゃんに言われたとおり息を吸い込んだ。でも、何も起こらない。狼が動きを止めた。そろそろ私を仕留めることにしたらしい。跳躍しようと身体を低く床に沈める。

シグ、シグ、助けて。

私は心の中でシグを呼んだ。狼より強いシグ。私を守ってくれると言ったシグ。大好きなシグ。もう一度シグに会いたい。こんな所で獣に殺されるわけにはいかない。彼に会えるまで私は死ねない。

そう思ったとき、身のうちに不思議な感覚が湧き起こってきた。手足の先から暖かいものが注ぎ込まれてくるのだ。これがおばあちゃんの言ってる力なのだろうか。私は部屋の中を見回し、あの白い花の花粉のように輝く金の光が、小屋の壁を突き抜けて私へと集ま

つてくるのに気付いた。森の奥の方角から、川のように流れ込み、木の根に吸収される水のように手足を伝って私の身体へと入り込んでくる。

世界がこんなにきらきらと力で溢れていたなんて、今までちつとも気付かなかった。

急に気が大きくなった私は、狼に向かって叫んだ。

「下がちなさい！」

私自身が驚くほどの迫力に満ちた声に、狼は慌てて跳びずさった。寝台の下のおばあちゃんが励ますように声をかける。

「うまいもんだよ。力が集まってきたようだね。さあ、その力を思い切り、そのケダモノにぶつけておやり」

「どうしたらいいの？」

「あいつの中に悪しき心を感じるだろう？ それを目掛けて思い切り投げつけてやればいいのさ」

小娘に驚かされたのが悔しかったのか、狼は怒りのこもった唸り声を上げて私を睨んでいる。再び、飛び掛ろうと身構えるのを見て、私は慌てた。

「駄目、何も感じないわ」

「目をつぶってごらん。そのほうがよく見える」

今にも襲い掛かろうとしている狼を前に目をつぶるのは怖かったけれど、私はおばあちゃんの言葉を信じぎゅっと目を閉じた。不思議なことに、目を閉じていても部屋中にあふれる金色の光は消えない。私のすぐ目の前にいる狼の存在もはつきりと感じられた。木々が空へと枝を伸ばすように、土の中に根を張るように、私の感覚は広がり、狼の中へと入り込んでいく。

そして、私はそこに探していたものを見つけた。

私が再び目を開くと同時に、狼が跳んだ。巨大な身体が私の前に着地する。寝台が大きく揺れ、おばあちゃんが悲鳴をあげた。

「赤頭巾！ どうしたんだい？」

狼は私に躍りかかり、私は両手を大きく広げて狼の身体を受け止めた。そして、狼の鮮やかな緑の瞳に向かい私は言った。

「こんにちは、シグ」

「こんにちは。赤頭巾」

長い舌で自分の鼻の頭をべろりと舐めると、狼は礼儀正しく挨拶を返した。喉の奥から絞り出されるような低い声は、私の知っているシグの澄んだ声とは似ても似つかない。それでもこの狼は確かにシグだった。

おばあちゃんがけたたましい声で笑いながら、寝台の下から這い出して来た。ばさばさに乱れた白髪はほこりだらけだ。

「たいしたもんだね。こいつの正体を見抜くとは、さすがあたしの孫だよ」

しわだらけの顔をさらにくしゃくしゃにして、おばあちゃんは得意そうだ。狼に食べられずに済んだ私は、安堵のあまり寝台の上に乗ったんと座り込んだ。急に腹が立ってきてシグの顔を睨み付ける。

「ひどいじゃない。食べられちゃうかと思ったわ。どうしてあんなことをしたの？」

「すみませんでした。あなたのおばあ様の言いつけだったのです」

シグは申し訳なさそうに大きな耳をぺたりと後ろに倒した。そんな事だろうとは思ったけど。私は問いかけるようにおばあちゃんの顔を見た。

「こいつがね、お前に会いたくて仕方がないと泣き付いてくるから、試してやったのさ。もしお前がこいつの正体に気付くようなら、お前たちの仲を許してやるってね」

私は目をまるくした。

「仲を許す？」

「お前だってまんざらでもないんだろう？ あんた達の間にはたしかに絆が見える。あたしは何も言わないことにしたよ」

おばあちゃんの言葉に、狼は上目遣いで私を見上げた。恥ずかしそうだ。

「でも、狼の姿をしているわ。おばあちゃんが意地悪をして変えてしまったの?」

「おや、お前には分からないのかい?　これがこの子の本当の姿なんだよ」

そんな……。

私はシグに話しかけた。

「シグ、そうなの?」

「そうです。あなたを怖がらせないように人の姿をしていました」

私を花畑で待っていてくれたシグは、肌も服も真っ白で髪の毛はお日様みたいにきらきらしてたのに……。この狼は鼻の頭から尻尾の先まで、見事なまでに真っ黒だ。戸惑いを隠せず私は言った。

「全然違うのね」

「醜い狼の姿だと、あなたに嫌われてしまふと思ったのです」

「それにしちゃあ、ずいぶんと見栄をはったもんだね。あの姿じゃ惚れるなって言うほうが無理さ」

おばあちゃんの嘲るような口調に、　　狼は気まずそうに自分の足

元を見た。

「ねえ、おばあちゃんがいいって言ったら、シグはまた人に戻るのね」

「それが……」

言い淀んだシグに私は不安になった。

「もしかして、ずっとこのままなの？」

おばあちゃんがまた笑った。

「心配はいらない。お前が少し修行を積みめば、シグはまた人に戻るよ。この子は私の力を借りて人の姿をしていたのだからね」

そこで急におばあちゃんは真顔に戻り、横目でシグを睨んだ。

「借りると言うより、勝手に拝借と言ったほうが正しいかもしれないがねえ」

シグは大きな頭を前足の間に挟みこみ、ひゅーん、と鳴いた。あれからおばあちゃんに相当絞られたのだろう。

「修行って何のこと？」

「魔法の修行だよ。お前がうまく力を使えるようになれば、シグもお前の力を借りられるようになるだろう？ お前は私の後を継ぐのにふさわしいだけの力を持っている。見ての通り、私は病に侵されているからね、魔法は弱くなる一方だ。そろそろお前には、跡継ぎ

としての修行を始めてもらわなくてはね」

「おばあちゃんは、私に魔女になれって言っの？」

「嫌なのかい？ お前だつてこの歳になれば、働きに出なくちゃならないよ。街でお針子でもして、金持ちの男に嫁ぐつもりなのかい」

私はシグの顔を見た。まん丸な二つの瞳が、不安の色を浮かべてこちらを見返している。

「私が魔女になればシグは人の姿に戻れるのね」

「ああそつだ」

「それならやるしかないわね。どんなお金持ちの男よりも、シグのほうがずっと素敵なもの」

シグの尻尾がぱたぱたと動いた。狼も尻尾を振るなんて知らなかった。

突然、おばあちゃんが窓の方を見た。

「来るよ。五人だ」

シグが勢いよく跳ね起きると背中 of 毛を逆立てる。喉の奥から低

いっなり声が漏れた。

「どうしたの？ 誰が来るの？」

「この森を狙ってる奴らがいるんだよ。あたしの力が弱ったからまじないも弱くなった。もう何もかも締め出してはおくのは無理なさ。その隙を突かれたね」

シグが悔しそうになる。

「すみません。私が見張っていなければならなかったのに」

「シグが？」

「まじないを幾重に重ねても、どうしても隙間を抜けてくる奴がいる。そいつらを追い払うのがシグの役目だったのさ」

「私は何百年もの間、この森に住む魔女と契約を交わしてきました。森を守る代償としてこの森で暮らすことを許されるのです」

私は首を傾げた。

「おばあちゃんのお手伝いをしていたの？ それなのにおばあちゃん、シグに冷たかったじゃないの」

「真っ黒なケダモノの分際であたしのかわいい孫を狙うからさ。当たり前だろう？」

そう言つとおばあちゃんは椅子に座り込んだ。顔が青白い。氣勢を張って元気なフリをしてはいるが、相当弱っているのだろう。

「ここにいたら見つかったわよ」

不安そうな私にシグが提案した。

「石の洞窟まで行きましょう。あそこの方があなた達を守りやすい」

「でもずいぶん距離があるわ」

おばあちゃんが驚いた顔で私を見る。

「どうして知ってるんだい」

私はぺろりと舌を出した。

「シグに教えてもらったの。森の中のことは何でも知ってるわ」

「だってお前、いつも道を通って来てたんだろ？」

おばあちゃんは恐ろしい形相でシグを睨みつけ、かわいそうなシグは惨めな様子で、尻尾を後ろ足の間に挟み込んだ。

「お前、あたしを騙してたんだね」

「すみません。どうしても赤頭巾と会いたかったのです」

シグの声は消えてなくなりそうだ。

「いくら守られているからと言っても、森の中は危険なんだよ。あたしを追い出してあいつらを招きいれようって奴もいるんだ」

「だから私が守ってきたのです。彼女には誰にも手を触れさせはしません」

おばあちゃんに怯えながらも、シグは最後の言葉だけは力強く言い放った。

私は寝台の上の毛布をたたむと小脇に抱えた。部屋の中を見回し、必要になりそうなものをすばやく籠に収める。

「おばあちゃん。その話は後にして。早く行かないと悪い人たちが来ちゃうわ」

おばあちゃんはシグの首に腕を巻きつけ、よろよろと歩き出した。やつとの事で前庭のブナの木まで辿り着いたが、この調子ではいつになったら目的地に着けるのかわからない。

「ねえ、シグに乗っちゃったら？」

「やめとくれ。狼にまたがるだなんて、まるで魔女みたいじゃないか」

「だって魔女なんでしょう？」

「みんなはそう呼ぶがね。あたしには魔法らしい魔法は使えないんだよ」

私は有無を言わずおばあちゃんの腰を抱えると、シグの背中に押し上げた。

「しっかりつかまっけていてください」

シグが勢いよく走り出す。おばあちゃんは悪態をつきながらシグの首にしがみついた。

「そんなに大きな声を出しては見つかりますよ」

毛布と籠を抱え、私もシグの後を追って走り出した。異変に気付いたのか生き物達はすっかり姿を消し、森の中は静まり返っている。洞窟を目指して私達は昼下がりの森を走り抜けた。

その4（前書き）

その辺りは起伏が激しく、ごつごつした岩山が方々に聳え立っていた。固い岩の間にも木々は逞しく根を張り、遠くから見れば緑に覆われた緩やかな丘にしか見えない。石の洞窟は、そんな岩山にぱつくりと口を開けた裂け目のひとつだった。長い年月のうちに岩山から剥がれ落ちた岩石が転がり、付近は迷路のように入り組んでいる。よそ者が気安く入って来られる場所ではない。

洞窟に入ると私は冷たい床に毛布を広げ、おばあちゃんをその上に座らせた。狼の背に揺られたせいか息が荒い。ぶどう酒を飲ませようとして、重い瓶を小屋に残してきたのを思い出した。

「ヘルガ、大丈夫ですか？」

シグがいたわるようにおばあちゃんの手にも鼻先を押し付ける。

「ああ、大丈夫だ」

今までおばあちゃんの名前を知らなかったことに私は気付いた。村人はおばあちゃんの話は避けるし、薬屋の主人も「あの方」とか「ご老体」なんて曖昧な呼び方しかしない。シグとおばあちゃんは深い絆で結ばれているようだ。彼は何百年もの間、この森の魔女に仕えてきたと言った。いつからおばあちゃんを知ってるのだろう。

「ほら、赤頭巾のところにいっておやり。あたしにヤキモチを焼いているよ」

おばあちゃんがからかうようにシグの首を押す。自分がつまらな

さそうな顔をしていたのに気付き私は赤くなった。シグは落ち着かない様子で私に向かって数歩歩き、少し離れたところに腰を下ろした。

「どうかしたの？」

「本当は、あなたにこの姿を見られたくないのです」

シグの恥じ入る様子に、おばあちゃんが笑いだした。

「そりゃあ、あんな綺麗ななりをして田舎娘を騙してたんだからね。世間様じゃ、お前みたいなのを詐欺師って呼ぶんだよ」

「そんなこと、ちつとも思っていないわ」

私は大声でそう言うとおばあちゃんを睨んだ。それでもシグが気まずそうにもじもじしているので、私は話題を変えることにした。

「これからどうするの？」

「奴らの狙いはあたしだからね。小屋の辺りを探して見つからなければ、諦めて帰るしかないだろうね」

「でもまた戻って来たら？ おばあちゃん、もう魔法は使えないんでしょう？ 悪い人が来るたびに、逃げ出さなきゃならないの？」

「さっきのは芝居だよ。昔ほどじゃないにしろ、まだ少しは使えるさ。孫にちよっかいを出す狼を懲らしめるぐらいにはね」

狼の巨体がびくりと動いた。おばあちゃんはシグをからかうの

が楽しくて仕方ないみたいだ。

「だがね、今日はあまり具合がよくないんだ。五人も追い払うのは骨が折れそうだからね、次はしっかり下準備をして、出直して来たところをとっちめてやるさ」

おばあちゃんは半分嘘をついている。確かに今日は具合がよくないかもしれない。でも最近は調子のいい日なんてほとんどないのだ。おばあちゃんのまじないで、森も、村も、王様の住む都も守られている。そうシグは言っていた。もしおばあちゃんの身に何かあったら、どうなっちゃうんだろう？

「悪い人たちは今どこにいるの？」

おばあちゃんは目を閉じ、しばらく黙り込んでいたが、やがてまた目を開いて首をひねった。

「おかしいね。奴ら、こっちに向かっている。近づいてくるよ」

シグは洞窟の入り口から頭を突き出すと、風の臭いを嗅いだ。

「連中に小道から外れる度胸があるとは思いませんでしたね」

「気配は消したつもりなんだがね。あたし達の居場所をつかんでるようだ。手引きしている奴らがいるね」

手引きをしたのは『人間を憎む者たち』だろう。シグも同じ事を考えたらしく、腹立たしげにうなり声をあげる。どうして森を守るおばあちゃんが『人間を憎む者たち』を森から追い出してしまわないのか、彼に尋ねたことがある。人間たちよりずっと早くから森に

住んでいた彼らには、森で暮らす権利があるのだとシグは教えてくれた。

「戦うしかありませんね」

「ああ、だが、こいつらからは黒い魔法の臭いがぷんぷんするよ。手ごわいかもしれないね」

「黒い魔法ってなに？」

「邪な奴らが使う魔法だよ。こいつらは隣国からの刺客かもしれないね。あたしの守りがなくなれば、この国に戦を仕掛けてくるつもりなのさ」

「邪な奴らって、隣の国の人達の事なの？」

「いや、この世の中には昔からね、人間の怒りや欲や苦しみを糧にしてる、醜くて薄汚い奴らがいるのさ。隣の国をけしかけて、戦を起こそうとしてるんだ。この国も隣の国も、奴らにとっちゃただの食い物に過ぎないんだよ」

背筋を冷たいものが走った。おばあちゃんの病が重くなってからというもの、真っ黒い波がひたひたと押し寄せてくるような気味の悪い予感に襲われることがあった。それが何だったのか分かった気がしたのだ。

「おばあちゃんはそのような恐ろしい相手と戦っていたの？」

「ああ、この森の力のお陰だね。だが、あたしがいなくなれば、この森も奴らの手に渡ってしまう」

「でも、森は私達の味方なのでしょう?」

「森は誰の味方でもないんだよ。残念なことだね」

諦めたようにそう言うと、おばあちゃんは立ち上がろうとした。
シグが慌てて跳ね起きるとおばあちゃんを制した。

「いけません、あなたはここから私を守っていてください。赤頭巾、ヘルガを頼みますよ」

さっきまでとは打って変わった態度で、シグが私に話しかけた。
大きくて優美な漆黒の獣。長い時を生き抜いてきた魔法に満ちた生き物。

「シグ。あなたは醜くなんてないよ。とても綺麗」

私はシグの首に両腕を回すと、しっかりと抱きしめた。黒光りするたてがみに顔を埋めれば、暖かな森の香りが鼻をくすぐる。

「シグに会いたかった」

彼の大きな頭が、私の髪の毛に押し付けられた。

「私もです。赤頭巾」

名残惜しそうに鼻の先で私の頬に触れると、シグは私から離れた。

「ヘルガ、お願いします」

おばあちゃんは頷き、目を閉じる。ゆらゆらと洞窟の中を漂っていた光の粉が、一斉におばあちゃんに向かって動き始め、螺旋の軌跡を残して身体へと吸い込まれていく。やがて私たちの背後、森の奥の方角から、光の奔流が流れ込んで来た。

「だめだ、これが精一杯だよ」

激流はますます勢いを増し、おばあちゃんの身体はまばゆいほどに輝いている。さつき小屋の中で私が集めた力とは比べ物にならない。何がだめだと言うのか分からず、私はおばあちゃんとシグを交互に眺めた。

「これで十分です。すぐに終わらせます」

シグはもう一度私の顔を見つめると、くるりと向きを変え、鉄砲玉のように表へと飛び出していった。私はおばあちゃんの邪魔にならぬよう、少し離れたところに座ると息を殺して待った。

やがて遠くから男たちの叫び声が聞こえた。苦痛の混じった悲鳴。泣き叫ぶ声。そして……銃声。

おばあちゃんが身体を二つに折り曲げ、大きく息を吐き出した。目標を失った光の粒たちは一斉に方角を変えると、潮が引くように洞窟の壁の中へと消えて行く。急に辺りが闇に包まれた気がした。

「どうしたの？ 何があったの？」

苦しそくに喘ぎながら胸を押さえるおばあちゃんを、私は助け起こした。顔には血の気がない。

「あたしは大丈夫だ。あいつら、獵師を連れてきたんだ。まじないを込めた弾を使ったんだよ」

獵師？

私は気付いた。違う、痛みを感じたのはおばあちゃんじゃない。シグだ。

「おばあちゃん、私、行くわ」

「おやめ、危ないよ」

引きとめようとするおばあちゃんの手を振り払い、私は銃声の聞こえた方角へ一目散に走った。

その4

その辺りは起伏が激しく、ごつごつした岩山が方々に聳え立っていた。固い岩の間にも木々は逞しく根を張り、遠くから見れば緑に覆われた緩やかな丘にしか見えない。石の洞窟は、そんな岩山にぱつくりと口を開けた裂け目のひとつだった。長い年月のうちに岩山から剥がれ落ちた岩石が転がり、付近は迷路のように入り組んでいる。よそ者が気安く入って来られる場所ではない。

洞窟に入ると私は冷たい床に毛布を広げ、おばあちゃんをその上に座らせた。狼の背に揺られたせいか息が荒い。ぶどう酒を飲ませようとして、重い瓶を小屋に残してきたのを思い出した。

「ヘルガ、大丈夫ですか？」

シグがいたわるようにおばあちゃんの手にも鼻先を押し付ける。

「ああ、大丈夫だ」

今までおばあちゃんの名前を知らなかったことに私は気付いた。村人はおばあちゃんの話は避けるし、薬屋の主人も「あの方」とか「ご老体」なんて曖昧な呼び方しかない。シグとおばあちゃんは深い絆で結ばれているようだ。彼は何百年もの間、この森の魔女に仕えてきたと言った。いつからおばあちゃんを知ってるのだろう。

「ほら、赤頭巾のところにいっておやり。あたしにヤキモチを焼いているよ」

おばあちゃんがからかうようにシグの首を押す。自分がつまらな

さそうな顔をしていたのに気付く私は赤くなった。シグは落ち着かない様子で私に向かって数歩歩き、少し離れたところに腰を下ろした。

「どうかしたの？」

「本当は、あなたにこの姿を見られたくないのです」

シグの恥じ入る様子に、おばあちゃんが笑いだした。

「そりゃあ、あんな綺麗ななりをして田舎娘を騙してたんだからね。世間様じゃ、お前みたいなのを詐欺師って呼ぶんだよ」

「そんなこと、ちつとも思っていないわ」

私は大声でそう言うとおばあちゃんを睨んだ。それでもシグが気まずそうにもじもじしているので、私は話題を変えることにした。

「これからどうするの？」

「奴らの狙いはあたしだからね。小屋の辺りを探して見つからなければ、諦めて帰るしかないだろうね」

「でもまた戻って来たら？ おばあちゃん、もう魔法は使えないんでしょう？ 悪い人が来るたびに、逃げ出さなきゃならないの？」

「さっきのは芝居だよ。昔ほどじゃないにしろ、まだ少しは使えるさ。孫にちよっかいを出す狼を懲らしめるくらいにはね」

狼の巨体がびくりと動いた。おばあちゃんはシグをからかうの

が楽しくて仕方ないみたいだ。

「だがね、今日はあまり具合がよくないんだ。五人も追い払うのは骨が折れそうだからね、次はしっかり下準備をして、出直して来たところをとっちめてやるさ」

おばあちゃんは半分嘘をついている。確かに今日は具合がよくないかもしれない。でも最近は調子のいい日なんてほとんどないのだ。おばあちゃんのまじないで、森も、村も、王様の住む都も守られている。そうシグは言っていた。もしおばあちゃんの身に何かあったら、どうなっちゃうんだろう？

「悪い人たちは今どこにいるの？」

おばあちゃんは目を閉じ、しばらく黙り込んでいたが、やがてまた目を開いて首をひねった。

「おかしいね。奴ら、こっちに向かっている。近づいてくるよ」

シグは洞窟の入り口から頭を突き出すと、風の臭いを嗅いだ。

「連中に小道から外れる度胸があるとは思いませんでしたね」

「気配は消したつもりなんだがね。あたし達の居場所をつかんでるようだ。手引きしている奴らがいるね」

手引きをしたのは『人間を憎む者たち』だろう。シグも同じ事を考えたらしく、腹立たしげにうなり声をあげる。どうして森を守るおばあちゃんが『人間を憎む者たち』を森から追い出してしまわなののか、彼に尋ねたことがある。人間たちよりずっと早くから森に

住んでいた彼らには、森で暮らす権利があるのだとシグは教えてくれた。

「戦うしかありませんね」

「ああ、だが、こいつらからは黒い魔法の臭いがぷんぷんするよ。手ごわいかもしれないね」

「黒い魔法ってなに？」

「邪な奴らが使う魔法だよ。こいつらは隣国からの刺客かもしれないね。あたしの守りがなくなれば、この国に戦を仕掛けてくるつもりなのさ」

「邪な奴らって、隣の国の人達の事なの？」

「いいや、この世の中には昔からね、人間の怒りや欲や苦しみを糧にしてる、醜くて薄汚い奴らがいるのさ。隣の国をけしかけて、戦を起こそうとしてるんだ。この国も隣の国も、奴らにとっちゃただの食い物に過ぎないんだよ」

背筋を冷たいものが走った。おばあちゃんの病が重くなってからというもの、真っ黒い波がひたひたと押し寄せてくるような気味の悪い予感に襲われることがあった。それが何だったのか分かった気がしたのだ。

「おばあちゃんはそのような恐ろしい相手と戦っていたの？」

「ああ、この森の力のお陰だね。だが、あたしがいなくなれば、この森も奴らの手に渡ってしまう」

「でも、森は私達の味方なのでしょう?」

「森は誰の味方でもないんだよ。残念なことだね」

諦めたようにそう言うと、おばあちゃんは立ち上がろうとした。
シグが慌てて跳ね起きるとおばあちゃんを制した。

「いけません、あなたはここから私を守っていてください。赤頭巾、ヘルガを頼みますよ」

さっきまでとは打って変わった態度で、シグが私に話しかけた。
大きくて優美な漆黒の獣。長い時を生き抜いてきた魔法に満ちた生き物。

「シグ。あなたは醜くなんてないよ。とても綺麗」

私はシグの首に両腕を回すと、しっかりと抱きしめた。黒光りするたてがみに顔を埋めれば、暖かな森の香りが鼻をくすぐる。

「シグに会いたかった」

彼の大きな頭が、私の髪の毛に押し付けられた。

「私もです。赤頭巾」

名残惜しそうに鼻の先で私の頬に触れると、シグは私から離れた。

「ヘルガ、お願いします」

おばあちゃんは頷き、目を閉じる。ゆらゆらと洞窟の中を漂っていた光の粉が、一斉におばあちゃんに向かって動き始め、螺旋の軌跡を残して身体へと吸い込まれていく。やがて私たちの背後、森の奥の方角から、光の奔流が流れ込んで来た。

「だめだ、これが精一杯だよ」

激流はますます勢いを増し、おばあちゃんの身体はまばゆいほどに輝いている。さつき小屋の中で私が集めた力とは比べ物にならない。何がだめだと言うのか分からず、私はおばあちゃんとシグを交互に眺めた。

「これで十分です。すぐに終わらせます」

シグはもう一度私の顔を見つめると、くるりと向きを変え、鉄砲玉のように表へと飛び出していった。私はおばあちゃんの邪魔にならぬよう、少し離れたところに座ると息を殺して待った。

やがて遠くから男たちの叫び声が聞こえた。苦痛の混じった悲鳴。泣き叫ぶ声。そして……銃声。

おばあちゃんが身体を二つに折り曲げ、大きく息を吐き出した。目標を失った光の粒たちは一斉に方角を変えると、潮が引くように洞窟の壁の中へと消えて行く。急に辺りが闇に包まれた気がした。

「どうしたの？ 何があったの？」

苦しそくに喘ぎながら胸を押さえるおばあちゃんを、私は助け起こした。顔には血の気がない。

「あたしは大丈夫だ。あいつら、獵師を連れてきたんだ。まじないを込めた弾を使ったんだよ」

獵師？

私は気付いた。違う、痛みを感じたのはおばあちゃんじゃない。シグだ。

「おばあちゃん、私、行くわ」

「おやめ、危ないよ」

引きとめようとするおばあちゃんの手を振り払い、私は銃声の聞こえた方角へ一目散に走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4584z/>

森の中であなたを待ってる

2011年12月17日19時52分発行